

## 第2章 物語としてのキャリア

### — 森の語り場 —

北村 真也



#### 4. 機会開発という考え方

こんな生徒がいました。私立中学に通っていた彼女は、先生との折り合いが合わなくなったことがきっかけで、学校へ行けなくなりました。どこにも行くところがないので毎日家にいて、しかたがなくやり始めたことが、絵を描くということでした。最初は漫画のイラストから始めて、やがて外国人の映画スターのデッサン、それから外国の絵本のイラストへと、どんどんその対象は変わっていきました。そして知誠館にやってきた時は、かなりの腕前になっていたのです。

知誠館に通い始めた彼女には、少し変わったところがありました。それは教科の学習の場面で、先生の説明は聞いているものどこか上の空。ふと目を離すとノートにはなにやらイラストのスケッチが…。彼女にとっては、絵を描くことがいつもメインの文脈で、教科の学習はサブの文脈。そんな感覚を私たちはいつも彼女に対して抱いていたのです。そしてそれは、学習の時だけではありませんでした。学習以外で彼女と話している時も同じでした。やはりスケッチブックを手から離そうとはしないので

す。実際、彼女の絵は、周りの誰をも唸らせるだけの作品でもありました。プロとしてやっていけないのではないかと、いろいろな人に言われることもありました。そして彼女は一旦描き始めると、食事もとらずに没頭するのだそうです。その集中力は、半端なものではありませんでした。

私たちは、そんな彼女の作品を一度芸術大学の先生に見てもらうことを考えました。彼女の才能やその作品の完成度を判断してもらいたいと思ったのです。すると先生は彼女の才能を大変高く評価し、「今すぐにも大学に来てもらいたいくらいです」というコトバを投げかけてくれました。自信をつけた彼女は、その後芸術コースを持った高校へと進学を希望し、ストレートに芸術大学への進路を目指すことになりました。

彼女は学校へ行けなくなったことで、自分の新たな才能に気づかされていったのです。それは学校へ行っている時は、予感さえなかったものでした。不登校というのは確かに当事者である本人にとっても家族にとっても、大変ショッキングなことです。しかし、そうなる初めて気がつくこともあるということを、彼女は私たちに教えて

くれたのです。

また知誠館で毎年行われる卒業式の場面では、「不登校になってよかった」という声をよく耳にします。当事者である若者たちにとっても、あるいは一緒に苦しんできた親たちにとっても、学校に行かなくなったことで見えなくなる世界があるように、学校へ行かなくなることで初めて見えてくる世界がある。そういったことを、あらためて気づかされるのです。

多くの不登校やひきこもりの当事者である若者たちは、自分が学校へ行っていないことに対して後ろめたい感情を持っています。そこには問題を持った私がいて、親に心配をかけている自分自身を否定している私がいるのです。中には親と葛藤を繰り返している若者たちもいるでしょうが、その葛藤を繰り返せば繰り返すほど、彼らは自分自身を責め続けるのです。彼らにとっても、親たちにとっても、不登校やひきこもりは否定されるべき問題行動なのです。

ところがこれらの問題行動が、何らかのきっかけで、若者たちが大きく変わるためのかけがえのない経験となることがあります。まさに問題があるからこそ気づけたり、問題があるからこそ変容を生じさせることができる。そんな機会が存在するのです。こうした考え方を私たちは、「機会開発」*opportunity development*と呼んでいます。機会開発の考え方では、たとえ失敗や問題であっても、あらゆる経験を自分の学びとして取り込みます。不登校やひきこもりの経験を持つ若者は、学校や友達関係、ある

いは家庭の中で何かしらうまくいかなかった経験を持っていることが多いです。そしてその経験の中で勇気をくじかれ、やる気をなくしたり自信を失ったりしています。うまくいかない状況は、その人を自ずと立ち止まらせます。しかし多くの場合は、その壁を越えることはできずに、何かに依存したり何かに逃避したり、何か責任転嫁することになっています。ところが機会開発の考え方では、問題そのものを変容の機会として捉えるのです。

問題そのものが変容の機会となっていく。そのためには、当事者である若者たちの認知、あるいはバイアスそのものを一旦外して、新しいものへと更新しなければなりません。そしてそこには、自分とは違った視点、あるいは俯瞰性を持った視点が必要となります。そしてそれを足掛かりとして、今まで自分自身を支配してきたフレームの存在に気付く必要があるのです。このことは閉塞的な状況に対して、その振り返りをおこなうことへとつながり、さらには、閉塞的な状況を突破するために新たな視野を手に入れることにつながっていくのです。

さらに問題を変容への機会へと置き換えていくためには、コトバの存在が必要不可欠です。若者が自分のコトバを使い、自分のこれまでの経験を問題から機会へと変換していく過程が、とても大事になってくるのです。そしてそのためには、彼らが借り物のコトバではなく、自分のコトバを手に入れていることがその前提となるのです。「自分のコトバとは何か」。その問いがさらに重要になるのかもしれない。

この章では、若者たちがライフストーリーを語るというセッションの場面を取り上げました。これは彼らが、「辛く苦しい過去」の中にしまいこんできた自分自身と向き合う作業であり、その作業を通して今の自分自身を見つめる場面です。つまりここでは彼らの過去が窓となり鏡となって、過去の自分と現在の自分が出会っていくことになるのです。これは対象化と呼ばれ、過去の自分自身を現在の自分自身が見つめ、コトバに置き換える作業を通して、変容を遂げた現在の自分自身がより明確に認識されていくのです。

またこの語りの場は、仲間たちとより深く出会っていく過程でもありました。出会いは感動を呼び、感動は新たな出会いを生みます。感動は、出会った両者に共通の要素が存在していることの証明であり、他人事が自分事へと変わっていく過程でもあるのです。従ってこの森の語り場に参加している若者たちにとっても、対話型の双方向のやり取りを通して自分の思考そのものがどんどん更新されていく、まさに変容の過程を経験しているように思います。

「機会開発」という考え方は、若者たちの変容を前提としています。そこに変容が生じた時、彼らの問題が未来への機会へと置換されていくのです。そしてその変容が生じるためには、自分とは違った視点を持つ他者の存在、そしてそんな他者とある一定以上の深さで出会うための意図（アフォーダンス）を備えた場の存在、さらには変容した自分自身を認識していくための

過去の自分への対象化とそれを表現する自分のコトバの存在、そんな条件が必要となっていくと考えます。

繰り返しになりますが、知誠館の最大の使命は、不登校やひきこもりの若者たちの変容を促すことです。このことは、そのままの彼らの状況を尊重するのではなく、より積極的に彼らの人生が活性化していくことを期待するものです。だからこそ、その変容の可能性をどこまでもあきらめないのです。私たちは、不登校やひきこもり経験を持つ若者たちを、従来の価値観の中に縛っておくことに対してとても懐疑的に考えています。そうではなく、彼らの現状に寄り添いながらも、そこから生じていく変容の新芽を大事に育てながら、もう一度その人生の物語を再構築して、新しい物語の可能性を見出していく。まさに物語としてのキャリアを経験してもらうことに尽きないように思います。そしてこのことこそが、ドイツの社会教育が目指すベルーフ（天職）*Beruf* の獲得へとつながっていくのだと思うのです。

